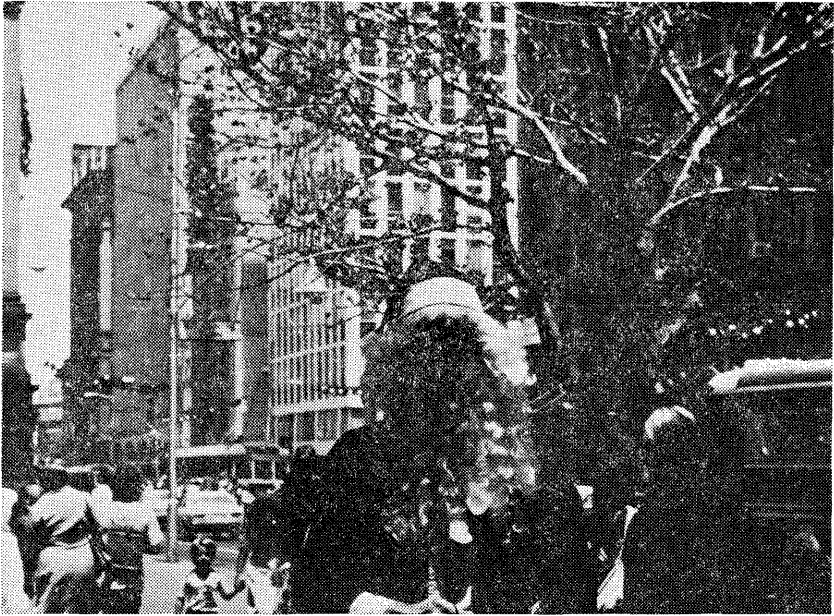


夏のクリスマス

小澤 誉 子



オーストラリアのクリスマスは、十一月にはいると始まる。各デパートを中心に、クリスマスモードが高まってゆく。

メルボルンの街も、その中央を走るスワンストリートには、色とりどりのモールが飾られ、タウンホールの広場には、大きな木が立てられる。赤や黄色、金や銀の飾りが夏の強い日射しに照らされて、キラキラと感ぜられるほどになる。

オーストラリアのクリスマスは、真夏の最大のイベントなのだ。クリスマスは、サマーホリデイの開始を告げる一年のうちで最もはなやかであり、楽しみな行事である。

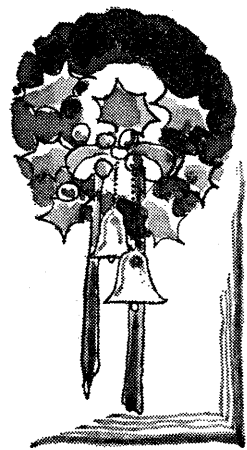
Tシャツやサマードレスの人々がクリスマスツリーの下を歩く。冬のクリスマススになれている私の眼には、そのツリーの色とりどりのかざりが、まるで、七夕の飾りのようにうつる。

オーストラリアは、元は英国植民地だ。一九八八年が建国二百年に当る、アメリカよりも、若い国である。しかし、アメリカが、その独自の個性的な文化を創造したのに比べると、オーストラリアは、未だイギリスの文化を色濃く残している国といえる。特に、オーストラリアでも長い歴史を誇るメルボルンは、一九〇一年に連邦政府が設置され、その後、首都がキャンベラに移るまで、政治・文化の中心だったことから、イギリスのふんいきを強く漂わせている。レンガ造りの建物や緑豊かな公園は、まさにロンドン郊外を思わせる。

そんな街でのクリスマスは、にぎやかとは言え、日本の商業ベースのみ先行するクリスマスとは、根本的に違っている。もちろんクリスチャンの数も多く、宗教的な色彩が濃いのはもちろんだが、クリスマス自体の伝統の

差を感じさせる。

デパートの中で目をひくのは、クリスマスカードの多さだ。伝統的なデザインやオーソドックスなデザインの中に、オーストラリアらしさを強く打ち出したカードが、最近多くなったのは、オーストラリア自身の文化を打ち出そうとする積極的な姿勢と、国自体が、いつまでも、イギリス色をひきずるのではなく、オーストラリア独自の文化に自信を持ってきたためだろう。カンガルー



が赤いサンタクロースの衣装を着て、水上スキーをやっているものなど、夏のクリスマスを楽しんでいる心がかがえる。

数年前だと思うが、郵便局がクリスマスの記念切手を作った。そのデザインは、水着を着たサンタクロースが、サーフィンに乗っている姿である。そのコミカルなデザインは、人気を呼んで「オーストラリアのサンタクロースは、サーフィンに乗ってやってくる」と子供たちが信じたほどだ。

ところで、ここで、オーストラリアのクリスマスの絵本を紹介しよう。

ストーリーは、ひとりの女の子が、クリスマス近くの日、ふとサンタクロースは一体どこからやってくるのかという疑問をもつ所から始まる。サンタクロースは、ソリにのってやってくるとその女の子の読んだ本には書いてあった。しかし、オーストラリアのクリスマスは、夏のさかりだから、雪など降ろうはずはない。そこでもしかしたら、サンタクロースは、来ないのではないかと不



安になるのだ。それに、ヨーロッパなど、北半球を中心に活躍するサンタクロースが、南半球まで、本当にやって来てくれるのだろうか、そのことも一層彼女を不安にする、という話だ。

この本は、とてもオーストラリアの子供たちの気持ちを表わしているのではないかと思う。というのは、クリスマスのお話は、ほとんど雪に関わりをもっている。クリスマスキャロル、マッチ売りの少女などは、その代表だが、その他の話でも、クリスマスの場面は、冬であり、赤々と燃えるマンツルピースやキャンドルが、登場する。つまり、クリスマス文化は、すべて北半球で作られているのだ。したがって、南半球の子供にとって、クリスマスに雪が降るなどということは、とても想像できない。しかし、十二月二十五日になれば、夏であろうとクリスマスはやってくる。そこに子供たちは、ギャップを感じる。切手が子供たちに人気だったのも、サーフィンの方が、ソリよりも、オーストラリアのクリスマスにマッチしていたためだろう。



こんなことを言っただけでは、オーストラリア人の気分を害してしまいかもしれないが、オーストラリアという国は、どうも国際的な舞台では、目立たない地味な国である。日本人の中にも、未だ、オーストラリアとオーストリアの区別のつかない人がいるほどだ。

最近の円高で、オーストラリアに行く日本人旅行者数は急増した。ハワイに次いで、最近人気のハネムーンコースとして、若い人の注目を浴びている。しかし未だに、そのイメージは、カンガルーとコアラの国というものであり、その文化より、自然が、イメージの中心となっている。



地味な目立たぬ国という淋しさを、オーストラリア人自身、心の中のどこかに持っているように思えてならない。これは、三年間オーストラリアに生活して感じたこ

となのだ。

このストーリーの女の子が、サンタクロースに忘れられないかと思うのは、まさに、この心境からではないかと思う。

この女の子のみならず、私自身、オーストラリアに生活すると、季節の違いから、ファッションも半年遅れてしまう。そして、すべての文化などの流れが、北半球を中心に展開されていることを感じざるをえない。季節の差がこれほど大きいものとは、それまで考えもしなかったことである。

デパートの中に「ホワイトクリスマス」の曲が流れている。「夢に見るホワイトクリスマス……」という詞を口ずさみながら外に出ると、真夏の強い太陽が、肌に痛いほどだった。

